

## 神奈川県立生命の星・地球博物館 特別出版物ができました

わたなべ きょうへい  
渡辺 恭平(学芸員)

### はじめに

コロナ禍による博物館活動の自粛は、イベントの中止や展示室の閉鎖を伴って、多くの皆さんから博物館を利用する機会を奪いました。そのような状況下で、博物館は何もしていなかったわけではなく、それぞれの職員が色々な制限の中で出来る仕事を考えて実施してきました。今回は、そのような中で誕生した神奈川県立生命の星・地球博物館 特別出版物（以下、特別出版物）について紹介します。

### コロナ禍転じて福とせよ！

コロナ禍により学芸員の業務のうち、講座や観察会、展示、遠方への出張がほぼ無くなりました。また、対面のイベントが軒並み中止となり、Zoom等を用いたオンライン会合や在宅勤務が増えました。このような状況は私に、標本の整理や研究活動、専門分野の勉強に多くの時間を割ける状況をもたらしました。これらの仕事の多くは地味なものです。博物館にとっても、学芸員の専門性の維持や向上のためにも重要です。しかしながら、普段は色々な仕事に忙殺される学芸員には、作業や活動のための「まとまった時間」を確保することが、なかなかできません。私が専門とする昆虫類は小型で標本の持ち運びもしやすく、観察に特に高度な機材も必要としません。また、コロナ禍前から私費で自宅に研究設備を揃えていたことや、県からの在宅勤務推奨も完全に追い風となり、これらの仕事を集中して進めるには絶好の機会となりました。

私にとっての長年の懸案はハチの中でも苦手であったハナバチ類の同定で、いわゆる普通種の種名調べですら容易でなく、問合せが来るたびに頭を抱えていました。コロナ禍のまとまった時間はこの類の勉強や標本整理に絶好の機会です。それに関連した調査の話は自然科学のとびら 104号 (Vol. 27, No. 3) や友の会通信 114号に書きましたが、標本整理や勉強が進むにつれて自分がノートに作成していた同定資料も

充実してゆきました。自分のノートを見ながら、この資料を世に出すべきでは、という考えが生じてきました。実は、ハナバチ類は2014年に出版された図鑑があるものの、いくつかの理由により図鑑だけではハナバチの種名を調べることが困難な状況であり、多くの愛好家からも困っているという声を聞いていました。そのような背景から、私は自身が作成したノートを基にハナバチ類の同定資料を作成し、それを世に出すことを企画しました。

### 特別出版物の誕生まで

企画の実現には、2つの大きな課題をクリアする必要があります。1つ目の課題は専門性の向上で、私はハチの専門家ではありませんが、本業は寄生蜂類の分類学で、ハナバチ類に特化した専門家ではありません。そこで、私の師匠である長瀬博彦さんに指導を仰ぎました。長瀬さんはハナバチに詳しく、先述の図鑑の著者の一人でもあり、国内に産するハナバチの大半をご自身で所有されていることから、その指導は私にとって大いに勉強となりました。原稿と標本を長瀬さんと私の間で何度も往復させ、コロナの感染者数が減少したタイミングごとに長瀬さんのご自宅に訪問させていただき、同定の確認や標本や文献を見ながらの打ち合わせを行いました(図1)。充実した楽しい時間を過ごしながらか、ごく短時間に多くの種の標本を実際に見ることが出来たこともあり、ハナバチ類の知識が一気に充実しました。また、得られた知識と資料収集活動により、日本産のハナバチ類約390種のうち、7割近い種を集めることができ、結果として博物館の資料も見違えるほど



図1. 長瀬博彦さんとの打ち合わせ。



図2. 整理されたヒメハナバチ科の標本。

充実しました(図2)。長瀬さんのお力添えのおかげで、なんとか最低限の水準は満たすことができました。

2つ目の課題は同定資料の出版方法です。私が作成した資料の原稿は、図鑑で不足している検索表が主ですが、説明のために多くの線画を加えたために100ページを超えてしまいました。このようなものを紙媒体で印刷する予算は博物館にありませんし、チョウやクワガタムシのように愛好家も多くはないため、売上げが要求される営利出版物としての出版も困難です。仮に出版できたとしても、とても高価になるでしょう。博物館の出版物では研究報告と神奈川自然誌資料が電子出版物となっており、これらはページの制限や印刷コストがないため、まとまった研究成果を公表できますが、論文などが対象であり、図鑑や検索表といった論文以外の資料を出せる媒体ではありません。そこで、当館の新しい

出版物を考えることにしました。私の方でアイデアをまとめ、他の学芸員から意見をいただきながら、論文形式ではない学術活動の成果を発表する、不定期刊行の電子出版物である「特別出版物」誕生の下地を作りました。その後、博物館内部における特別出版物の位置づけや執筆や編集の決まり事など、多くの館職員の協力を得て準備が進みました。館内調整と並行して編集作業も行い、今年の2月15日にめでたく第1号が出版されました(図3~5)。このデータは博物館のウェブサイト誰でも、無料で閲覧できます(URL: <https://nh.kanagawa-museum.jp/www/contents/1643173895521/index.html>)。

特別出版物が出来たことにより、学芸員は学術研究の成果をより広く公開できるようになりました。学芸員が編集作業を行う必要はありませんが、電子出版物ですから出版費用はかかりません。今後、博物館の収蔵資料を基にした図鑑や検索表はもちろん、企画展の図録や講座に使っている資料など、営利出版物としての刊行が難しい成果物が出版されることが期待できます。

思ったよりも大きな反響

特別出版物 第1号の出版後、多くのハチ愛好家より良い反響が届きました。昆虫をはじめとする自然愛好家の中でもインターネット上でちょっとした話題になったようで、情報資料課によると2022年2月分の博物館のウェブサイトのアクセス統計で、特別出版物のページのアクセス数が上位4位(1451ページビュー)になったそうです。まったく新しいページが

公開後半月で数百あるページの上位4位になることは異例とのことらしいですが、特別出版物の情報がネットのロコミで広まったことが推測され、改めてネットの情報伝達力の凄さを思い知りました。今回の資料は多少とも難しい内容も含むため、閲覧した人にどれくらい活用してもらえるかは未知数ですが、多くの人に届けるという点では、成功したと考えています。

愛好家以外に、他館の学芸員からも、若干の反響がありました。どれも限られた予算の中で、長編の資料やカラー写真をふんだんに使った資料の印刷に頭を抱えているようでした。研究報告や神奈川自然誌資料も含め、当館の試みは他館のモデルケースとなるのが期待できます。

おわりに

ここまで、私が特に専門とするヒメバチ科寄生蜂についての話題が出ませんが、こちらも特別出版物の出版に向けて準備を進めています。私が2006年にヒメバチの研究を始めてから、今年で16年になりますが、この間に250種以上のヒメバチを日本のヒメバチ相に追加し、全国でも有数のコレクションを築くこともできました。また、嬉しいことに一緒にヒメバチを調べてくれる仲間や、興味を持ってくれる方が増えてきました。この流れをさらに

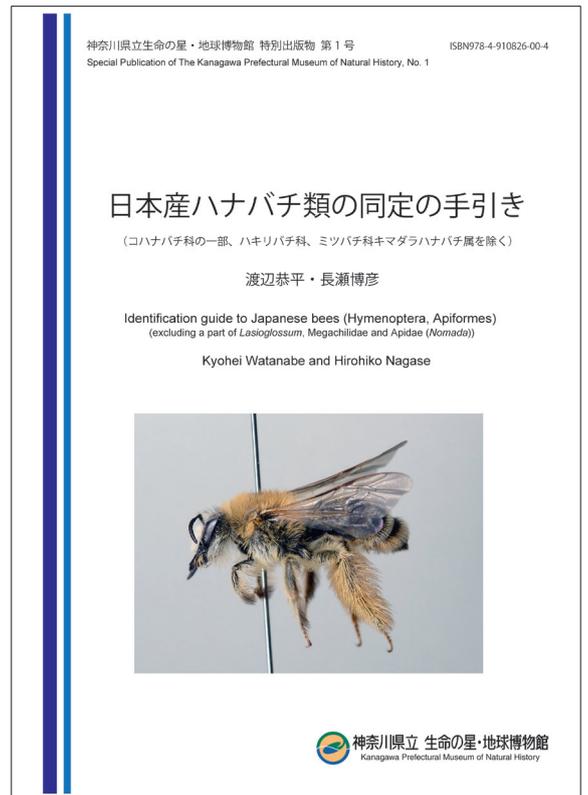


図3. 特別出版物 第1号の表紙。

加速させるには、現在のように英語やロシア語の文献を読まなければヒメバチが同定できないままではダメです。せめて属までは日本語で同定できる資料を作りたいというのは、私の長年の夢の一つであり、コロナ禍を利用してその実現に向けて計画を進めています。日本産のヒメバチ科だけで約420属もいるのでまとめるのは大変ですが、コロナ禍でまとまった時間が確保できたことから、これを機にせつせと資料を作っています。現在、原稿の最終チェックを進めており、今年度中には特別出版物 第2号として、公開できると思いますので、ご期待ください。



図4. 特別出版物 第1号の内容(22~23ページ)。

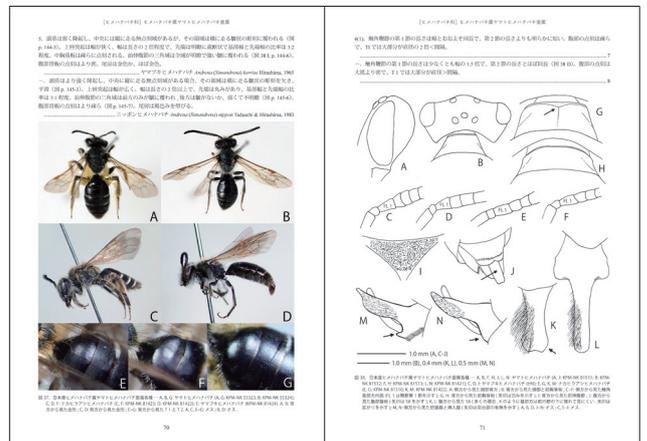


図5. 特別出版物 第1号の内容(70~71ページ)。